

小学生の漢字力に関する実態調査 ——全体の傾向について

日本国語教育学会理事
白百合女子大学非常勤講師 河西泰道

漢字テストの「正答率」が低い

苦手は、「漢字を読み替えた場合」と「生活になじみのうすい言葉」の書き

「漢字力調査」の実施にあたって

● はじめに

今回の漢字力調査は、各学年配当漢字を全て出題し、「学習した漢字を書くことができるか」を調査する漢字テストと、国語、漢字、読書等における「意識・習慣に関する調査」の二部構成で行った。

現行の学習指導要領の漢字学習の示され方に、「各学年においては、学年別漢字配当表の当該学年までに配当されている漢字を読むこと。また、当該学年の前の学年までに配当されている漢字を書き、文や文章の中で使うとともに、当該学年に配当されている漢字を漸次書くようにすること」とあるが、上の学年に移行された書きが、果たして次の学年で習得されたかどうかは、確認されていないのが実態である。そのため「どの程度書くことができるのか」という実態を確認することに、意味があると考えます。また、近年、子どもたちの学力の低下を指摘する声が多い。次のデータは、「国語力に関する教師の意識調査」の結果の一部である（国立教育政策研究所・2001年、小中高校教師256人）。

Q1. 国語の学力は低下したか？

1	とてもそう思う	16.1%
2	そう思う	47.4%
3	そう思わない	22.1%
4	わからない	14.5%

Q2. どんな点で低下したか？（複数回答）

1	語彙力	63.0%
2	文章を書く力	53.0%
3	漢字を書く力	48.0%
	文章を読む力	48.0%

国語の学力が低下しているかの質問には、63.5%の教員が「低下している」（とてもそう思う＋そう思う）と回答している。

文字そのものに意味をこめているという、世界に誇れる漢字の学習は、単に文字を読み書くというだけでなく、言葉そのものの獲得になっていることに気づいていない子どもが多いのではないだろうか。教師自身もそこまで意識して教えていけば、もっと漢字の学習は楽しいはずだし、語彙数も増えていくはずである。結果、漢字を読むことも、書くことにも苦手意識を持つ子どもは減っていくと考えられるが、今回の「漢字力調査」と並行して行った「意識・習慣に関する調査」では、次のことがわかっている。

問	得意	不得意
あなたは、漢字を読むことが得意ですか。	67.8%	30.1%
あなたは、漢字を書くことが得意ですか。	53.5%	44.7%

（数値は、「得意」は「(とても+まあ) 得意」、「不得意」は「(あまり+まったく) 得意ではない」の合計）

特に漢字を書くことへの苦手意識が高いが、書くことだけでなく、読むことへの苦手意識が高い子どもの漢字力も低いことが漢字テストでは確かめられた。

● 本漢字力調査の特徴

- (1) 第1学年から第6学年までに配当されている教育漢字1,006字について、全て出題している。各漢字につき、複数の読み方(音読み・訓読み)で出題をしたが、その漢字の読みは問わず、書けるか否かのみを調査した。
 - * 該当する全ての読み方を出題していない漢字が含まれている。
 - * 漢字配当学年では習わない読みでも、小学校6年間で学習する読み方は出題した。
- (2) 学習指導要領に従い、学年配当漢字を全て学習した状態で調査を行った。調査は5月より行われ、児童(生徒)は前学年に配当されている漢字について回答した。
- (3) 調査全人数は8,955名。各学年のサンプル数は、いずれも1,400名以上である。
- (4) 国語、漢字、読書等に関わる意識・習慣についての調査も同時に行っている。

以上のことから、本調査での「漢字力」とは、実際に書く力の高低を指し、その実態を多角的に検討できるよう、調査を設計した。

調査結果から

● 1年生と2年生、4年生と5年生の間の正答率に断層

正しく解答できたものを「正答」、事前に定めた誤りの観点に当てはまる誤字を「誤答」、まったく何の解答もないものを「無答」とし、それぞれの比率を確認した。よって、「誤答」+「無答」が正答できなかった割合の全体(=不正解)となる。

全体 正答率 57.9% 誤答率 23.9% 無答率 18.2% (不正解率=42.1%)

	全体	1年生	2年生	3年生	4年生	5年生	6年生
正答率	57.9%	62.6%	59.0%	59.0%	58.7%	54.2%	54.6%
誤答率	23.9%	21.2%	24.3%	23.0%	22.5%	24.0%	28.5%
無答率	18.2%	16.2%	16.6%	18.0%	18.8%	21.9%	16.8%
(不正解率)	(42.1%)	(37.4%)	(40.9%)	(41.0%)	(41.3%)	(45.9%)	(45.3%)

- 正答率 ① 1年生の62.6%を筆頭に、5年生まで正答率は下がる。
② 1年生と2年生の間は3.6ポイント、4年生と5年生の間は4.5ポイント下がる。

- 誤答率 ① 最も誤答率が高いのは6年生の28.5%であった。次いで2年生の24.3%が目立つ。
② 6年生は5年生よりも4.5ポイント誤答率が高まる。

- 無答率 ① 1年生から5年生まで無答率は上がっていき、6年生で急に下がる。
6年生では5.1ポイント、前学年よりも無答率が下がる。
② 春から中学校に進学した生徒の無答率が改善するのは、意欲が高まっているためであろうか。

全体の正答率が57.9%と60%を切っているのは、低い印象を受ける。数値を見るにあたって、次の二点に留意する必要がある。

- ① 誤答の観点として13個の基準を用意し、採点時に厳密に見た。
- ② 漢字配当学年では習わない読みでも、小学校6年間で学習する読み方は漢字を書かせるべく出題した。その時点では習っていない読み方が問題文として出題されているケースも存在する。

正答率が低い原因として、特に②の影響がある。高学年になると、同じ漢字を読み替えるケースは、網羅度が高く学習済みとなる場合が多いので問題ない。しかし、3年生以下では、教科書による違いが影響する可能性がある。ある教科書では学年が上がらないと、その読みは習わないというケースが複数出てくる。それに該当する漢字は、正答率が低い結果となり、全体の数値に影響したと考えられる。したがって、採択している教科書では学習が済んでいるのにもかかわらず、正答率が低い文字に関して特に留意されたい。

また、別の視点として、教科書に新出漢字が出てきた際に、その文字の読み方を網羅度高く学習するには、授業の時間数には限りもあり、なかなか難しいという問題がある（また、教科書によっては、読み方に優先順位をつけて推奨しているものもある）。学年が上がってから、既習の漢字が書けるレベルを確認する指導もなかなか行えていないケースも含め、学年（6年生であれば小学校と中学校をまたいで）の連携を強化していくことで、子どもの漢字力を高めていくことは可能であると考えられる。

また、生活になじみのうすい言葉の正答率は低い。例えば、木（き96.2%、モク90.2%、ボク40.9%、こ3.3%）のように、その漢字を知っているのに「こ（の葉）」となると解答できなくなるケースがある。読み方が未学習かどうかと同時に、その年齢の子どもの生活にはなじみのうすいと思われる読み方であることも影響している。私たちの暮らしの中にはいくつもの言葉、言い方があること、その多様さ、面白さを、授業内容に限定せず、気づかせたい。漢字の表意性とその有効性、成り立ちや組み立て、由来などに関する話題を用意して、今一度興味づけを工夫する必要があるだろう。

そして、漢字を学ぶ際には、言葉そのものの獲得にもつながっているということを、繰り返し理解させていくことが、語彙力の増強につながり、言語をあやつる力の増強につながっていくはずである。

各学年の誤答傾向

1年生の誤答傾向 上位5位

1	出る・出ない・くつつく・くつつかない	25.3%
2	同音異字の混濁	23.9%
3	とめ・はねのミス	12.6%
4	不明	10.2%
5	送り仮名ミス	9.7%

2年生の誤答傾向 上位5位

1	同音異字の混濁	31.4%
2	点画の不足・過剰	10.7%
3	出る・出ない・くつつく・くつつかない	10.4%
4	送り仮名ミス	9.1%
5	不明	8.8%

3年生の誤答傾向 上位5位

1	同音異字の混濁	28.4%
2	その他の字形ミス	15.4%
3	出る・出ない・くつつく・くつつかない	12.0%
4	点画の不足・過剰	9.6%
5	類似字形のミス	9.1%

4年生の誤答傾向 上位5位

1	同音異字の混濁	38.3%
2	その他の字形ミス	13.2%
3	類似字形のミス	9.6%
4	不明	8.4%
5	点画の不足・過剰	7.8%

5年生の誤答傾向 上位5位

1	同音異字の混濁	48.1%
2	とめ・はねのミス	9.4%
3	その他の字形ミス	8.0%
4	類似字形のミス	7.4%
5	送り仮名ミス	6.7%

6年生の誤答傾向 上位5位

1	同音異字の混濁	30.2%
2	とめ・はねのミス	25.2%
3	その他の字形ミス	12.2%
4	不明	9.5%
5	点画の不足・過剰	5.3%

◎数字は、誤答と判断した観点のトップの全合計に占める割合。